

タイトル「萌の思索―社会に出るとは―」

「ねえ。『社会に出る』ってどういう事なのかな？」

と、突然つぶやいた太秦萌に、松賀咲と小野ミサが面食らった様子で反応した。

「ん、急にどうかしたんか萌？」

「誰かに何か言われたの？」

「うちの学校に一人ちよつと厳しい先生がいてね、忘れ物とか課題提出が遅れた時とか『そんなことでは社会に出たら通用しないよ』って叱るのが口癖なの。もちろん約束を守るのは当然だと思うんだけど、『社会に出る』って改めてどういう事なのか気になってね」

「そうやなあ、就職したら『社会人になる』ってイメージかなあ」

「私の好きなアニメで『大人は誰でもつらいから、お酒を飲んでもいい事になっている』って確か言ってたと思うけど、『大人になる』っていうのとは違うのかなあ？」

「まだ高校生のうちにもうそんな事考えるなんて萌はすごいなあ！でも萌、お姉さんに聞いてみるのが一番いいんじゃないか？」

「私もそう思うけど、それちよつと恥ずかしいよね。私もお兄ちゃんにはそういう事聞かなくていいと思う」

(うーん、お姉ちゃんの事はすごいと思ってるけど、やっぱり何か照れ臭いなあ……。)

数日後の夕刻、帰宅途中の萌は珍しい人に遭遇した。ミサの兄小野陵の親友にしてパン職員見習いの十条タケル。親族以外では萌にとって最も身近な「働く大人」の一人である。

「あれっ、タケルさん、仕事帰りですか？」

「おお萌ちゃんか。こんな所で会うなんて奇遇やな、元気してたか？」

「おかげさまで・そうだタケルさん、ちよつとお話したいんですけど時間いいですか？」

「タケルさんはもう社会に出て働いているわけですけど『社会に出る』ってどういう感じなんでしょうか？」

「確かに俺は働いてるけど、正直そういう事は考えた事ないなあ。働く＝『社会に出る』ってわけでもないやろうし。大学生と言っても陵の方がしつかりしとるから、あいつの方が『社会に出ている』感はあるかなあと思うよ。」

もう少し深く聞きたそうな萌の思いを察したタケルはさらに続けた。

「まあ『社会人と学生の違い』ならはつきりしとるかな。学校のテストだと平均点以上なら優秀扱いだけど、社会人は基本的に「百点が当たり前」で失敗は許されへんからね。後はその結果を継続する必要もある。『社会に出ると求められる』のはこういう事かもしれないね。」

「うわあ、結構厳しいかも……。でもすつごく参考になりました！ありがとうございますタケルさん。」

「俺も全然まだまだなのに、偉そうな事言って悪いな。それよりも、萌ちゃんのお姉さんは俺から見てもすつごくかっこいいし、俺なんかより一回聞いてみたらどうなんかな？」

(タケルさんも咲やミサと同じ事言ってる。こゝは思い切ってお姉ちゃんに聞いてみるか

な？)

コトキン・ライナーの金曜日だが珍しく早い帰宅の太秦麗。今日は自作の漬物のつかり具合を確かめながらゆっくり一人で晩酌のつもりである。

「あっ、お姉ちゃん今日は家でお酒なんだ。私がお酌してあげよっか？」

「んー、何かな萌、お姉ちゃんにお小遣いをおねだりだった今日はダメだよ？」

「そんなんじゃないって、たまにはお姉ちゃんと真面目な話とかしてみたいなあと思って。さあさあどうぞ。」

「じゃあ喜んで。で、どうしたの？何か悩みでもあるの？もしかして恋バナ？」

「はは、そんなんじゃないんだけど、その……『社会に出る』ってどういう事なのかなあと思っ……。」

これまでの経緯を萌から聞いた麗は思わず感嘆の声を上げた。

「萌は偉いね。私も同じように悩んだ事はあったけど、それは大学に入ってからやったし、高校生の時点でそう考えられるってすごいと思うよ。さすが私の妹はかわいいだけじゃないねー！」

もう酔ってからかっているのか、と見返した萌の眼に映る姉は、穏やかにほほ笑みつつもその眼は真剣そのものだった。

「咲ちゃんもミサちゃんも、タケル君の言う事も全部正しいと思う。その上で私が確実に言えるのは『実際に社会に出てみないと分からない』という事かな。こんな答えでがっかりした？」

「ううん、そんな事ない。こういうのって正解はない事はよく分かるし。」

「誰でもいつかは社会へ出る事になるけど、その前の学生の時でしかできない事に全力で打ち込んだ事が、その後の社会に出た時にすごく役に立つのは間違いないよ。今の萌は、まづ今を全力で過ごしたらいいんじゃないかな？」

「そっか、ありがとうお姉ちゃん。ちょっと恥ずかしかったけど思い切って話してみても良かった。」

「それはよかった。まあね、社会に出た後は辛い事も結構あるけど、だから大人はお酒を飲んでもいいんだよ。早く賢い妹と一緒に飲みたいねえ、さあ萌、お酌お酌！」

(あはは、ミサと同じ事言ってる！)

心なしか嬉しそうに見える姉にせつせとお酌しつつ、こんな素敵なお見本が身近にいてくれる自分は幸せだと改めて思う萌だった。